

「万葉集の1番歌をよむ」

群馬県立女子大学教授 北川 和秀

籠もよ 籠持ち 掘串もよ 掘串持ち この岳に 菜摘ます見
家吉閑名告紗根 そらみつ 大和の国は おしなべて われこそ居れ
しきなべて われこそ居れ われにこそは 告らめ 家をも名をも

〈万葉集一・一〉

籠毛与 美籠母乳 布久思毛与 美夫君志持 此岳尔 菜採須兒
家吉閑名告紗根 虚見津 山跡乃国者 押奈戸手 吾許曾居 師吉名
倍手 吾己曾座 我許背齒 告目 家呼毛名雄母

〈万葉集一・一 原文〉

ア、家吉閑名 告紗根……家聞かな 告らさね
イ、家吉閑名 告紗根……家聞かな 名告らさね
ウ、家吉閑名 告紗根……家告らせ 名告らさね

き・く【聞・聴】『他カ五(四)』

①音、声、言葉などを耳に感じとる。耳にする。

*万葉(8C後)一八・四〇八九「鳴くほととぎす(略)夜渡し伎気(キケ)ど
伎久(キク)ごとに 心つごきて(大伴家持)」

*古今(905-914)仮名序「花に鳴くうぐひす、水にすむかはづの声をきけば」
*平家(13C前)一一・逆櫓「いかなるうき目をか見んずらん。いかなるうき
事をかきかんずらん」

*徒然草(1331頃)二二二「琵琶法師の物がたりをきかんとて、琵琶を召しよ
せたるに」

②音や言葉を耳にして、その内容を知る、そうだろうと思う。また、言伝え、
うわさなどを耳にする。

*古事記(712)下・歌謡「そらみつ 大和の国に 雁(かり)卵産(こむ)と
いまだ岐加(キカ)ず」

*書紀(720)継体七年・歌謡「麗(くは)し女(め)を 有りと枳枳(キキ)て
宜(よろ)し女を 有りと枳枳(キキ)て」

*土左(935頃)承平五年一月一日「この歌どもをすこしよろしとききて」

*源氏(1001-14頃)帚木「ねたりける声のしどけなき、いとよく似通ひたれ
ば、妹ときき給ひつ」

*徒然草(1331頃)一一二「明日は遠国へおもむくべしときかん人に、心閑(し
づか)になすべからんわざをば、人いひかけてんや」

③人の言葉に従う。承知する。聞き入れる。

*万葉(8C後)三・三六九「ものふの臣(おみ)の壮士(をとこ)は大君の任
(まけ)のまにまに聞(きく)といふものそ(金村歌集(作者未詳))」

*竹取(9C末-10C初)「是を聞て、ましてかくや姫きくべくもあらず」

*伊勢物語(10C前)二三「親のあはすれども、きかでなんありける」

*枕(10C終)八七・職の御曹司におはします頃、西の廂にて「それを制して、
きかざらん者をば申せ」

*愚管抄(1220)五・後白河「『むこにとらん』と義朝が云けるを(略)あら
きやうなる返事をしてきかざりける程に」

*永日小品(909)〈夏目漱石〉モナリサ「頻に止めたけれども、井深はなあ
に御前の神経だといって聞(き)かなかった」

④(答えを耳に入れようとして)人に尋ねる。考え、気持などを問う。

*源氏(1001-14頃)夕顔「君も今更にもらさじとしのび給へば、若君の上を
だにえきかず」

*方丈記(1212)「おのづから、事の便りに都をきけば、この山にこもり居て
後、やむごとなき人のかくれ給へるもあまた聞こゆ」

*浮世草子・好色一代男(682)一・五「其親里はときけば、山科の里にて、
源八とかたる」

*二人女房(891)〈尾崎紅葉〉上・七「私は宜(よろ)しうございませあね。
貴方さへ宜くば』『ええ、他人がましい事を言ふな。(略)胸を聞(キ)く
のだ。お前の胸をよ』」

*はやり唄(1902)〈小杉天外〉九「貴女だって、良心に問(キ)いたら解るで
せう」

⑤是非を判断する。判断して処置する。

*ささめごと(1463-64頃)下「我が句を面白く作るよりも、聞(きく)は遙かにいたりたしといへり」

*虎明本狂言・右近左近(室町末-近世初)「それほどに思ひつめた事ならば、某がぶぎやうになつて、くじをきひて見う」

*読史余論(1712)一・上皇御政務之事「此御代には院にて政をきかせ玉へば」

⑥ (「聞香」の訓読みからか)においをかぐ。
*名語記(1275)六「耳にもの音をきく、如何。答、聴也、聞也。―鼻に香をかぐもこのきく、同事也。聞香とかかれたり」

*両足院本山谷抄(1500頃)二「其時は香巖童子の香を聞て、此香は非烟非火非木として」

*俳諧・犬子集(1633)三・時鳥「何れきかん伽羅の初音と時鳥(堅結)」

*浮世草子・好色一代男(1682)五・三「千年川といふ香炉に厚割の一本を焼(たき)てきかせけるに」

*浄瑠璃・浦島年代記(1722)二「つねづねふつと飲むまい、盃も手にとらじと、思ひ切ても酒の香きけば前後を忘るる」

*春廼屋漫筆(1891)〈坪内逍遙〉政界叢話・一八「閣下願くは此かよわき植物を取りて其香を嗅(き)きたまへといふ」

⑦ (酒を)味わつてみる。味を試して違いを知る。
*虎寛本狂言・伯母が酒(室町末-近世初)「能い酒かあしい酒か私がきいて見ずは成ますまい程に、一つきかせて被下い」

*落語・縁結び浮名の恋風(1898)〈六代目桂文治〉「酒は飲(き)いて見た事も御座いませんし」

⑧ 当てて試みる。釣り合いを見る。「板の厚さにきいて釘を打つ」

以下、**方言**・**語源説**・**発音**・**上仮名**・**辞書**・**表記**・**同訓異字**の項目、および熟語は省略。ただし、語釈ごと・用例ごとに改行した。
(小学館『日本国語大辞典 第二版』)

① 難波潟 潮干に出でて 玉藻刈る 海未通女ども 汝が名告らさね
(巻九・一七二六)

② 漁する 人とを見ませ 草枕 旅行く人に わが名は告らじ
(巻九・一七二七)

③ 紫は 灰指すものぞ 海石榴市の 八十の衢に 逢へる児や誰

④ たらちねの 母が呼ぶ名を 申さめど 路行く人を 誰と知りてか
(巻十二・三二〇一)

⑤ 隼人の 名に負ふ夜声 いちしろく わが名は告りつ 妻と恃ませ
(巻十一・二四九七)

⑥ 玉梓の 道行く人も 一人だに 似てし行かねば すべてをなみ 妹が名喚びて 袖そ振りつる (巻二・二〇七) 柿本人麻呂

⑦ 畏みと告らずありしをみ越路の 手向に立ちて妹が名告りつ
(巻十五・三七三〇) 中臣宅守

⑧ 隠沼の下ゆ恋ふれば すべてを無み妹が名告りつ 忌むべきものを
(巻十一・二四四一) 柿本人麻呂歌集

⑨ 宇麻勢(馬柵)越し 麦食む駒の 巻十四・三五三七 或本歌)

⑩ 紅尔 深染西 情可母 寧楽乃京師尔 年之歴去倍吉
(巻六・一〇四四) 作者未詳

世間乎 常無物跡 今曾知 平城京師之 移徙見者
(巻六・一〇四五) 作者未詳

石綱乃 又変若反 青丹吉 奈良乃都乎 又将見鴨
(巻六・一〇四六) 作者未詳

紅に深く染みにし情かも寧楽の京師に年の経ぬべき 世間を常無きものと今そ知る平城の京師の移ろふ見れば 石綱のまた変若ちかへりあをによし奈良の都をまた見なむかも

⑪ 淑人乃 良跡吉見而 好常言師 芳野吉見与 良人四来三
(一・二七) 天武天皇

よき人のよしとよく見てよしと言ひし芳野よく見よよき人よく見

⑫ 百濟野乃 芽古枝尔 待春跡 居之鶯 鳴尔鷄鷓鴨
(八・一四三二) 山部赤人

百濟野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも

⑬ 言云者 三々二田八 醉四 小九 毛 心中二 我念羽奈九 二
(一一・二五八一) 作者未詳

言にいへば耳にたやすし少くも心のうちにわが思はなくに